

平成27年度 所内プロジェクト研究評価報告 (いずれかに○)

<p>課 題 名</p>	<p>農村イノベーションの推進に資する人材育成に関する研究</p>
<p>研究実施期間</p>	<p>平成27年度</p>
<p>政策研究の概要</p>	<p>農村地域においては、人口減少・高齢化等が進む中で、6次産業化や農業と異業種との連携を梃子にしたイノベーションの推進により、農林水産業の競争力が向上し、農村地域の活性化が図られることに大きな期待が寄せられている。</p> <p>こうした取り組みを推進するためには、リーダーとなる人材や多数の利害関係者を連携させるコーディネーターとなる人材を確保する必要がある。さらに、それらの人材を活かすためには、受け皿となる組織を確保するとともに、その受け皿組織が地域社会の他の組織と連携することによって、地域全体で重要な課題に取り組むことができるような体制づくりが必要となっている。</p> <p>本課題では、地域全体で地域活性化を目指している先進的な事例を取り上げ、活性化の基礎を成す社会組織間の連携状況や農村イノベーションの推進に資する国内での人材育成の体制や取組の成果等について、海外の事例も参考にしながら、調査・分析を実施する。</p> <p>また、大学・研究機関等との連携による食料産業振興の新たな動向を捉え、その中で核となる人材の役割や推進体制等について調査を行う。</p> <p>こうした調査結果を踏まえ、人材育成や育成された人材を活かす場である地域の組織連携のあり方について、今後の展開方向の検討素材を提供する。</p>
<p>評価結果</p> <p>○評価会議名及び開催日 平成27年度所内プロジェクト研究評価会 (平成28年度第6回研究推進委員会における内部評価) (平成28年9月5日)</p> <p>○評価委員名 出田安利 (次長) 吉田行郷 (企画広報室長) 玉井哲也 (国際領域長)</p>	<p>【評価項目ごとの評価】</p> <p>() 内は4名の評価委員の投票数を示す。</p> <p>○今後求められる政策課題等との関わり A評価 (1)、B評価 (3)</p> <p>○学術面からみた研究の評価 A評価 (2)、B評価 (2)</p> <p>○研究計画・研究資源・実施体制の妥当性 A評価 (1)、B評価 (3)</p> <p>○研究目標の達成度 A評価 (1)、B評価 (3)</p>

橋詰登(農業・農村領域長)

○ 評価基準

・ 今後求められる政策課題等との関わり

- S: 非常に大きく関連すると見込める
- A: 大きく関連すると見込める
- B: 関連が見込める
- C: 関連は小さい
- D: 関連は見込めない

・ 学術面からみた研究の評価

- S: 学術的に非常に高く評価できる
- A: 学術的に高く評価できる
- B: 学術的に評価できる
- C: 学術的な評価はやや低い
- D: 学術的な評価は低い

・ 研究計画・研究資源・実施体制の妥当性

- S: 非常に良い
- A: 妥当である
- B: 概ね妥当である
- C: やや妥当でない
- D: 妥当ではない

・ 研究目標の達成度

- S: 達成度は非常に高い
- A: 達成度は高い
- B: 概ね達成している
- C: 達成度はやや低い
- D: 達成度は低い

・ 総合評価

- 1. 目標を上回った
- 2. 目標を達成した
- 3. 目標を下回った
- 4. 目標を大きく下回った

【総合評価】

() 内は4名の評価委員の投票数を示す。

2. 目標を達成した(4)

【評価委員からの主な意見】

- 阿蘇、能登の例など、現地の実態を含め広く深く情報を集め、分析手法も新たなものを取り入れるなど充実が見られる。海外との比較は困難と考えるが、日本とは異なる社会の制度・実態などとも合わせて情報提供を行うことは有用と考える。
- 地域資源を活用した地域活性化の取組を持続的に展開するにあたって、社会組織間の連携状況とその特徴を明らかにすることからアプローチすることは極めて有効だと考えられる。今後、取組内容の異なる様々なタイプの地域活性化活動に着目し、何らかの法則性を見つけ出して欲しい。その上で、持続的に活動を展開するために必要とされる最も効果的な政策支援のあり方、特に、これら組織間の連携状況を維持・構築していくために必要な人材育成のあり方にも切り込んだ研究へと進化することを期待したい。
- SNA分析などもう少し政策インプリケーションの見込める課題に焦点を絞った研究計画とすべきであった。SNA分析は都市住民プロの中でより明確な政策インプリケーションが示されることを期待する。
- 海外事例の分析については、「農村イノベーションの推進に資する人材」という切り口ではなく、「農業の担い手の育成」という切り口で整理し直せば、我が国の担い手育成策にインプリケーションのある成果が見込めるのではないかと。
- 研究の基本である「仮説」をしっかりと立てて、どのようなアプローチでそれを「検証」するか、関係者でよく議論した上で、次の本格的なプロジェクト研究を進めてもらいたい。また、単なる事例紹介に陥らないよう、類型化を行った上で、比較分析を行って、それぞれの類型毎の効果と課題を浮き彫りにしてもらいたい。
- また、「農村イノベーション」のための人材育成を中心に据えているが、何が「農村イノベーション」なのか。「GIAHS」を「農村イノベーション」に第一の取り組みとして持ってくる整理には違和感を覚えた。その点をもう少し議論してから研究を進めてもらいたい。そして、疲弊している農村を活性化するためには、「農村イノベーション」と呼ばれるような取り組みが面白いと不可能なのか。それとも、地道な取り組みの積み上げで、農村は再生され得るのか。その点も分析の視点として取り入れて研究を進めてもらいたい。

今 後 の 対 応 方 針	<ul style="list-style-type: none">○平成28年度では、本研究の成果と評価結果を踏まえつつ、プロジェクト「都市住民等による農業・農村の価値・魅力の発揮を支える多様な取組に関する研究」として新たな視点も取り入れながら研究を深化させる。 ○具体的には、SNA分析法を用いて、阿蘇地域における組織間連携について、関係性や中心となる組織の役割をより詳細に分析するとともに、能登等についても同様の論点から整理・分析する。 ○これにより、地域が地元資源を活用し、持続的に発展していくための社会組織的な要件を解明する。
---------------	--